

2024年棚田学会大会シンポジウム 結果報告書

今年度の棚田学会大会シンポジウムは「産学と連携・協働する資源の農的保全・管理―棚田と棚田地域の持続可能性を探る―」をテーマとし、下記の日時に対面とオンライン併用方式により開催した。

1. 開催概要

開催日時：2024年8月24日 13:30～17:00

開催場所・方法：早稲田大学早稲田キャンパス 3号館 301教室を会場とした対面とZoomによるオンライン方式

参加者数：会場参加 56名、オンライン参加：39名（合計 95名）

2. 開催趣旨

開催趣旨は以下の通りである。

1999年、農林水産省により棚田保全活動の推進や農業・農村に対する理解を深めることを目的とする「棚田百選」が選定されて以来、棚田地域振興法（2019年）が制定、「棚田百選」を発展させた「つなぐ棚田遺産」（2022年）が選定されるなど、政策的な枠組みが整備されてきた。こうした流れを受け、棚田オーナー制度をはじめとするグリーン・ツーリズム、体験学習や環境学習などのコンテンツとして棚田が注目を集めた一方で、棚田地域やその周辺では過疎化、高齢化が進み、農業生産活動や保全活動の維持、担い手確保の困難さから荒廃の危機に直面する棚田も少なくない。

こうした状況の下、企業によるCSR活動、大学との社会連携協定や学生の学外活動など産学が有する知見や人的資源を棚田地域と連携・協働させ、農的資源や水資源の保全・管理に資する様々な取組が見られる。こうした取組の実態から今後の棚田地域の持続可能性を展望する。

3. プログラムおよび発表内容

プログラムは、(1)基調講演、(2)事例報告、(3)総合討論の3部構成とした。

当日は、開会挨拶（山路永司会長）、開催趣旨の再確認（上野裕治研究委員）、基調講演、3題の事例報告、総合討論の流れで進め、総括および閉会挨拶で締めくくった。

基調講演および事例報告の概要は以下のとおりである。

(1) 基調講演：ポリバレント化する地域連携のあり方と棚田保全・管理の持続可能性

平児慎太郎（名城大学農学部 准教授）

農村、大学、企業それぞれのニーズのポリバレント（多元）化と複雑化する地域課題について現状を報告。特に農村と大学との連携について様々な形態や現状、今後のあり方などについて報告・提案。

(2) 事例報告

事例報告1：中山間地域と大学の連携 - デザインからのアプローチ

境野広志（長岡造形大学造形学部 教授）

15年ほど取り組んでいる比礼地区棚田へのカカシ設置について、デザイン活動としての授業の取り組み状況、学生への教育効果、地域住民への効果など、成果と今後の課題について報告。

事例報告 2：若い力で棚田を守る新たな試み

平工孝義（一般社団法人ぎふクリーン農業研究センター 理事長）

岐阜大学「里山くらし応援隊」の活動について報告。岐阜大学と揖斐川町が締結した包括連携協定の一環としての居住や、棚田保全以外の地域における様々な活動への参加について報告。

事例報告 3：産・学・民・金による湛水事業と棚田の保全

大野芳範（公益財団法人肥後の水とみどりの愛護基金 専務理事）

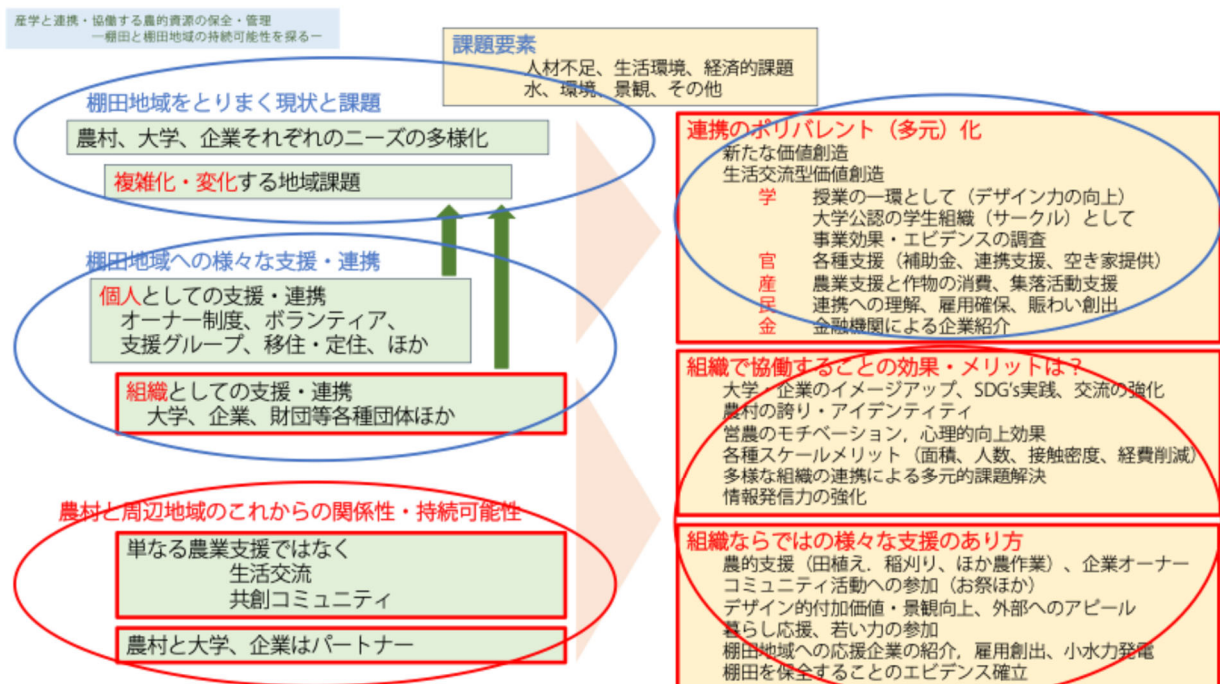
財団の目的は熊本の水の保全である。その大きな柱として財団の呼びかけによる複数の地元企業の賛同を得て阿蘇水掛けの棚田を維持している。産業・大学・民間企業・金融が連携した活動を模索中。

(3) 総合討論および総括

総合討論（司会：小谷あゆみ研究委員）では、会場参加者や聴講参加者からも多くの質問やコメントが寄せられるとともに、基調講演者や3人の報告者とのやり取りが活発に行われた。

最後に上野裕治研究委員長が以下のように総括した。

- 1) 農村、大学企業それぞれのニーズの多様化に対して、これまでも棚田地域への様々な支援・連携は棚田オーナー制度、ボランティア、支援グループ、移住・定住など各種行われてきたが、組織としての支援・連携についてはあまり論じられてこなかった。
- 2) 農村と周辺地域のこれからの関係性・持続可能性は、単なる農業支援だけではなく、生活交流や地域コミュニティを協働で創造してゆくことなど、大きな変化が求められている。
- 3) 今後の連携のあり方は農村地域（住民）と大学、行政、企業、金融機関など様々な連携のポリバレント（多元）化が求められている。このように組織としての様々な支援・連携のあり方が、今後の農村地域の持続可能性に貢献することとなるであろう。



総括ダイアグラム

以上のように、昨年に引き続き対面とWEB参加とのハイブリッド開催となったが、活発な議論を行うことができた。おそらくこの方式は今後とも継続するものと考えられる。

今回のシンポジウムでは、実践的な発表とともに活発な議論も行われ、今後の棚田地域の発展に寄与する大変有意義なシンポジウムであったと考える。

棚田学会研究委員長 上野裕治



総合討論の様子